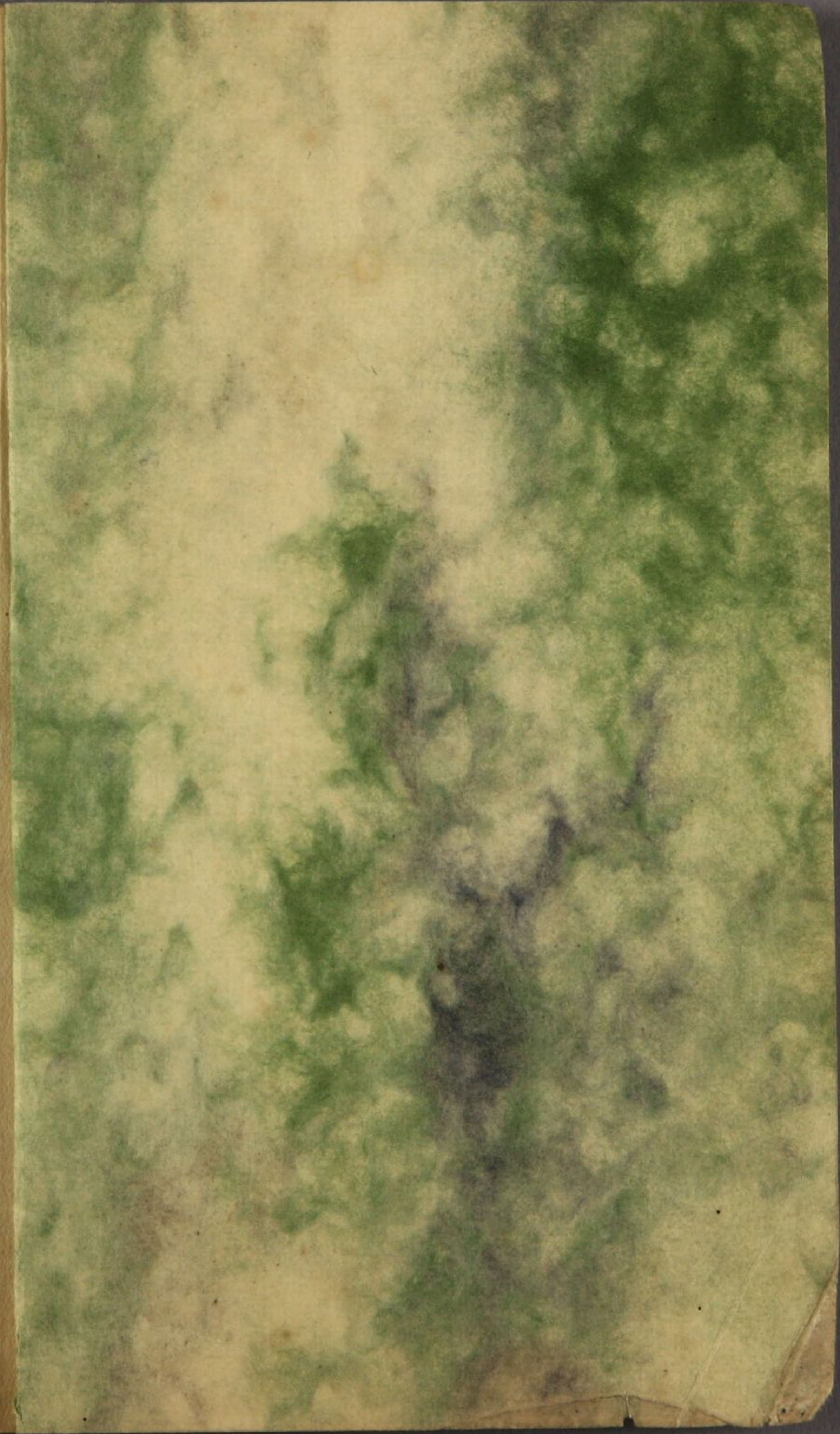






新

樹



新

樹

## 「新樹」に序す

われ思へらく、詩は平等なるべし。而して偏頗なるべからず、新しき手ぶりも古き姿も、よきはよく悪しきは悪しきとして之を分つ。かくして始めてまことの詩あり、又思へらく詩は活氣あるべし。而して因循なるべからず。枯木の如く冷灰の如き情思、いづくんど之をまことの詩とは言ふべけむ。又思へらく、詩は變化あるべし。而して單調なるべからず。あるは逞しく、あるはさびしく。あるは細やかに、あるは花やかなり。かくして始めてまことの詩あり。又思へらく、詩は生動すべし。而して姑息なるべからず。株を守り舟にきだつけて、心遲き翁めきたらむはいづくんど之をまことの詩とは言ふべけむ。かく思へば。詩の具ふべき性は平等と活氣と變化と生

動となり。是等の性を具ふるもの、之を萬物に求むれば僅かに夏の青葉あるのみ。満山只一色。河ぞ其平等なるや。天を呑み地を蔽ふ。何ぞ其活氣あるや。秋來りて千種の色あり。何ぞ其變化あるや。清蔭翠滴たらんとす。何ぞ其生氣あるや。この集に冠する青葉を以てしたる。深き心のありけるとふべし。

明治四十五年六月初五

武島羽衣

## 桐原の駒の鼻むけ

新派舊派といふこと何事の上にもあれど、其のよしあしの定めがたきは、形而上の事に多し。其の中にも文學は、見る人の心々にて、好しとも悪しとも言ふべければ、殊に斷りにくきなり。

趣味好尚の相違は何事の上にもあれど、もはら美のみを以て言ふべきものは、殊に區々に分れ紛るべし。我が歌の新派舊派といふことの論、かくて幾度繰り返されつゝも、定る期あるべからず。「物皆者新吉唯人者舊之應宣」といふは、新を喜びつゝ、尚舊の尊ふべきあるを認めたる者、「日新又日新」といへる支那古代の理想の中にも、尙古稽古といふことは萬般に亘りて横溢せるを見るべく、只管古きを尙ぶ神社祭祀などにも、清潔を旨とするからには新しきを取らざることあり「出づる日の本つ國ぶり豈うつさめや、劔太刀末の手ぶ

りは人うつすども」げに古からではあられぬ事もあり。舊と新と、争ふことあり、調和することあり、並立することあり、歌においてのみ専相争ふべき理あらんや。心を古にして詞を今にすると、心を新しくして詞を古にすると、心と詞と共に古にし新しくすると、皆各其の適否あるべし。

眞善美は物の三大方面にして、之を合せたるものは最上至極の全とたゞふべし、全と分と、統合と分別と、各取るべく見るべき所ありといへども、おしなべて言はゞ統合の全こそ至上なるべけれ。美を宗とする歌なりとも、國を離れ世を離れ人を離れ物を離るゝことはざる上は、眞と善とを超越すべしとは言ふべからず。美より言立する趣味好尚なども、此の眞と善との方より見るときは、容易に判断すべきことあるものなり。心と詞との眞と善と美と、これ宗と我

等の希求すべき所にして、舊派新派といふ如きは部分的の一小葛籐しばらく雲煙と視す可なり。かの純文學といふは、此の見地よりして言へば、論なく我等同人の隨喜すべきものにあらざるなり。

萬葉集のを、しくして古今集以下のめ、しくしきは、其の世其の人の異なるに因る。美より之を言ふときは、粗樸豪雄は優美絢爛に如かざるべけれど、我はむしる奈良の人たらんことを欲して平安の人たらんことを願はず。聖代興國の人士擇ぶ所を知らてはあるべからず。分業専門を尙べる世に謂はゆる歌よみたらんは固より害なしといへども、君子は器ならずといへる、亦深く思はてはあるべからず。「諸藝二百石、無藝高なし」といへる古諺は、移して今の代を説明すべく、又吾人の箴とすべし。心の力は無限なり、自己を修むるに足らざるもあれば、又國を治め世を濟ひて餘あるもあり。天然



と人事とに通ずる者は至人なり。士農工商文士軍人皆至人たるべし。至人の言は皆金玉の響あり。吉田松陰 勝海舟 山縣含雪公等の詠歌を見て赧然たらざる歌人幾何かある。而も謂はゆる歌人は己の修養すべき所に思ひ至ること能はず、徒に彫蟲の技に醒醒して、一藝を得たりとし専門の業にいそしむと思へる、悲しからずとせず。工人匠人文人藝人あらゆる器人は固より無かるべからざる者にはあれど、斯道に志あらん者は又別に天人の深大に通せんことを工夫し尋常工匠に超越せんことを務めざるべからず。

我が輩愚劣事志にかなはず、今此の言を口にするも愧づる所なきにあらねど、斗雲會の諸士と別るゝに當り餞として之を質す。

明治四十五年六月

三 矢 重 松

## 新 樹

### 初 陣

◎

井 上 淡 星

師をはなれ、友と別れ、一本の筆を唯一のたのみとして將に世に立たんとする時、第一に思ひ出されるのは母校の運命である、母校の生温なまあたかき慈愛なまけをたよりにヤット生存してゆくやうな不甲斐ない者となるまいと、かねぐり期してはゐるもの、母校の運命は

また流石に思ひ出されないではない、汝の筆を折つて母校のガラス窓を拭へといはれた時は、吾れに些の執着なく、吾が筆を折ることが出来ようか。

初陣の吾れには先づこれが重大問題である。

◎  
デカタン文學を隆盛ならしめる唯一の原因は、自分さへよければ人は構はぬといふ者どもである。小さい理性の繭まゆを吾れから製して、しかもその中に肩をすばめて身動きのとれぬ者も亦たそれと同じものといへる。

大日本帝國を毒する者はシビレたやうなデカタン文學者の徒にあらずして、小石のやうな冷たい理性の繭であらう、釜に入れられて眼が覺ゆるやうなことは、萬事休せり矣だ。

◎  
靖國神社に參拜する人は、必ず夜間、しかも人聲絶えたる時に於てせよ、眞の忠君の意義は電光の如く吾々の頭腦に閃き來るであらう。軍隊生活の苦痛を嘗めざる者には此の味は永久に分るまい。一令下る、直ちに父母兄弟、妻子朋友をすて、戰場にむかふ、這裡こゝに身をおく者でなくして忠君を説く権利はないと信ずる、すべての人は忠君を仰ぐべし、説く勿れ。不動の姿勢さへままんろくにとれぬ者に忠君は説けぬ。

◎  
電車に乗りて宮城の前を通る時、江戸ッ兒の本性は直ちに暴露される、ゆかしきは赤毛布である。

永久に若くありたい、鬚髯をのばして老人ぶる、この心たゞちに退嬰の基となる、詩人與謝野鉄幹曾て曰く「人間三十をこえなば當に若き人を手本とせよ」と。然り、少年少女の月刊雑誌を一冊讀まない教師が、生徒を心服させることが出来るものか——。

最後の一日に人間の本性を表現してしまふ、見よ多年猫をかぶりたる醜漢は、一切を自己の立場として割出し打算しようとするが世の常ではないか、人は自己をのみ唯一の立場とする時、母校、師、朋友を弊履の如く打ちすてしまふ。

再び言ふ、大日本帝國の將來は、小なる理性の繭の出來ない工夫

今日此のまゝが惟神かんたがらの道の發現であるといふのは國を危くする言である、努力奮闘して眞の惟神の道を遺憾なく發揮するのは將來であつて過去でない。

かくおもふ時、帝國の前途は希望に満ちてゐる。  
天照太神の徳光は、幾千万億那由他却に至つて更に——赫奕たるものがあるだらう。

傳通院の墓畔を逍遙する毎に、三百年の榮華がしのばれて、いひしらぬ悲しさに自ら涙が出る。

傳通院殿の墓碑には落日の光が血のやうに——。  
過去はすべて涙である、光榮は常に將來に存する。

◎ 旭日を拜せぬ人は日本臣民ではない。

◎ 机の抽出を何時誰れに引き出されても見苦しくない人、こんな人でなくては人の子を教へることは六かしい。

◎ 紙をのべ、ペンにインクを含ませて、イザ書かんとする時の心地は、武装をととのへて戦場に立つた時のやうな感じがする、觸るゝもの悉く打ち破らずんばやまぬといふ勢である。頼山陽をこんな時に思ひ出す。

◎ 黙せる人は蛇の如く、常に人を咀ふやうである。

「罪」

野 · 人

悪命の風に運ばれこゝかしこ我は落葉の如く  
彷徨ふ

咽び泣く物憂き響き我魂を暗く寂しく淵に追  
ひ行く

夜の魔の闇をかけりて野の末に吠ゆるか如く  
遠くきこゆる

懐し夜悪事の共謀人は狼の肉あさる如進み來  
りぬ

夜の暗さ死の眠りより救ひたる神の榮光の尊  
くもある

死と滅び暗き淵へと沈むるは神を嘲ける罪の  
花なり

一人思へば涙故なう溢れ出づ罪過と醜惡の化  
身の我は

世の美德罵る身には反抗と破壊と果ては我を  
滅ぼす

白粉と朱と入毛の彼の女鐵と黄金の冷めたき  
寶ぞ

濃き闇は此處を立て籠め怪像の姿は我を魔界  
よ誘ふ

言ひ難き甘味を含む誘惑の化粧の香夜氣に漂  
ふ

神の榮え靈魂の不滅を歌ひ得ぬ詩人の心闇に  
迷ふか

暗黒と罪と滅びとまつはりて我を恐怖の魔界  
にぞ追ふ

「女よ」

廢園の尾花を鳴らすそよ風のなかに淋しく君の佇む

窓によれば君ありし日の偲はれぬ山吹しほむ  
逝く春の夕

春となりぬ甘き悲哀は君故にまたひとしほの  
増すばかりなり

かなしかなし愛の醒めたる君思へば悶ゆる胸  
の痛ましきかな

泣くとてもすがる君だになきものを風よ落葉  
よ夜は静かなり

華やけき夢に生きんとする心君と逢ふ日殘夢  
に泛べぬ

君思へば涙ゆるるなうあふれいづ淋しき夜を春  
雨の降る

今日もまた戀しき君が名を呼びてかなしさに  
こそ獨り泣きしか

かなしきは行きて歸らぬ君なりき花咲き匂ふ  
春はきぬれど

あはれわが心はやゝに和みきつ思ひに燃ゆる  
君を思へば

# 新妻

栗原枕流

一一

現實に見る、戀の十八  
まろゑりに鬚姿ふさふ

薄茶けむりに銀箸の見ゆとて

朱唇は開き、玉齒は翻ばれ

清水焼の音のよきに  
耻らひの美頬——郎君に微笑む。

鬚布の赤き、襷の青き——可愛う

後れ毛を口に含みて米磨ぐと

そゝろに見しを、夜語りや——夫の誇り

さはれ優手に漬菜をきざむ  
刃力利きに戀は世に生く。

鳥影さす、春の寂寥

六疊の居間に新妻は物縫ふ

絹絲のさ緑——姫葛を戸に見る如く

針の手そよろ、快樂の笑まひ

思ひ出の胸に躍る、「時」の折々。

春宵の、燭火に映ゆる眸おとして

繙ける宇治の十帖

指にして紅印す古帙に

圓窓や、小心勢ふ

風のさわく——人生の美し法

法に黙想のひまを魂ちる。

柔腕に妬みを見せて

井車の軋り高く汲む

一三

水に浸<sup>ひ</sup>てたる衣<sup>きぬ</sup>にも想ふ  
女房ぶりは耻<sup>は</sup>かしながら

よき髪に姉様冠<sup>かむり</sup>襟足長う  
ゆらりと送る初夏の日影遅々<sup>うご</sup>  
垣間見の姿艶なり。

一四

塗籠<sup>ぬりご</sup>に秘めし驕樂の花の緋牡丹

キス甘く微笑<sup>ほほえ</sup>洩らす——興<sup>きょう</sup>がりに

眼蔽<sup>まなび</sup>ひし罪はにくうも

「優<sup>やさ</sup>し夫<sup>ぶ</sup>」——文に彫りて

勝ち誇る、戀の新妻——快樂<sup>くわく</sup>のクイン。

## 花ふぶき

蜷木公一

夕風にひさごかたむくさむしろに袖寒からぬ  
花ふぶきかな

小雨ふる池の柳の下かげに昔しのびて蛙なく  
なり

とことにはに榮えますらむ今年より羽をならべ  
しをしどりの宿

風車かすかにめぐる音のして轆ひらめくをの  
子もつ家

一五



法の師がかまさしのべて切るはすの花にぬれ  
けり今朝のむら雨

めでられて唇染むる日もありしべに皿今や叢  
に泣く

もみじしてあれし垣根にたゞひとりほこりが  
に咲く白菊の花

江の島のあら磯浪に鳴く千鳥の聲さへこほる  
冬の夜の月

道のべのくちし草鞋に霜おきてあけがた寒き  
岡越えの空

### 移り行く心

加藤 光 治

忘れじと秘めて誓ひし其日より薄らぎてゆく  
果敢ごとかな

我心いつとはなしに倦みはてぬたとへば朽ち  
し井戸側のごと

いふことも聴く事も憂し晝もなく夜もなく眠  
る術ぞと思ひぬ

何事か云はむ思ひ惑ふときさらばといひて行  
きし人かな

偽りて我身の上を告げしとき眼に涙もち憂ひし女

いかにもせん術あればこよと云ふ文みて獨嘲笑ひにき

杯盤は亂れてひとはどよむときふと浮びきぬ嫌悪<sup>にくみ</sup>てふこと

過ぎ去りし夢を辿りて行く人と語りし夕べ思はんとする

落葉ふみお暗き森に辿り入り「死」に怯えてき月赤き宵

# 磯寺

—— 多 満 喜 ——

磯寺の鐘の音海にひろがりて島より島に白帆  
きえゆく

波止場にて見送る船の影きえて波にくれゆく  
瀬戸の内海

真帆あげて岸に漕ぎよるいさり船父や歸ると  
少女よるこぶ

君と乗る思ひの船に帆をあげて理想の島にい  
つ漕ぎ行かむ

かの岸に火影見ゆるはわが家か父母やまつら  
んいそげ舟人

咲く花の花びらごと君の名をほりてぞおか  
んあがとこのまに

降りしきる雨にくれ行く鐘の音をひとり數へ  
てきくぞ寂しき

意氣高く自動車に乗る若紳士我世輕るげに烟  
立て行く

夕まぐれ馬引き歸る賤の男が笠も重けに雪ぞ  
ふりくる

### 山の影

永好如雲

わたし場の柳けふりて旅僧の船まつそでに春  
雨のふる

杜を出でしうなるのむれは野に消えて霞をも  
るゝかちどきの聲

老の身も知らてあるらんうる孫の黒髪なてゝ  
ゑめる媪は

山の影雲の姿もろのまゝにうかべてこほる諏  
訪の湖

若葉して春の心はのどかなり散るをなげかん  
花のなければ

動きなきいしずゑよりも都府樓のもろき瓦に  
昔しのびぬ

大利根は神代をとほく流れきて奇しくつくれ  
り下總の國

もえいつる緑を野邊の衣とみれば帯にも似た  
り春の里川

千鳥なく干瀉に春の潮さして一つくにいはいは  
は浮びぬ

### 病院にて

栗原枕流

命なるや現うつ覺えていたづきに惱む夕べを君が  
嫁ゆめくこと

ともすれば背そむくに呪ふ鬼の居て嘲けるが如ごと安か  
らぬか

な病みて身は哀愁の野に誘いざなはれ古き涙を新し  
くする

かの唇の腐りもせずさまざくと我が前に來  
てまたも囁く

黒田 勝見

# 朴の香

朴の香のあまくただよふ八月の青  
葉の中に消えし人影(亡祖父をしのびて)

朝風に藤の花房ゆらきては土にし  
み入る紫の露

夏の日の旅の疲を呼びさます聲する小さき静  
かなる驛

ふととまりとある大木に耳よせぬ大森林の中  
を行く時

虫の火に集ふが如く我がこゝろもゆれば人は  
ひれふりて来よ

淋しさにえ堪へて引くにうす月はカーテンす  
きて卓たの花にも

海の底珊瑚の家に住む魚が小さき戀もうらや  
ましけれ。

風ふけばからくくなりて慳の實の梢をすべり  
おつる朝寒

ふとしては胸にうき来る悲みの雲のあいると  
夕空を見つ

胸のうつろ木立しげりて蚊などひそむしづめ  
る思ひ六月半

うるみたる君がひとみを見る心ち月にすこし  
く雲のひきたる

柳原うすく灯ともり夕ぐれも初秋頃はことに  
淋しき

雨にうるむ窓の硝子にうつり来る癡兵院のう  
すき灯

白帆二つ何かたらひでかへり来る夕月にほふ  
うす霧の海

藻の花にさゝやくが如さゝ波のひた／＼うつ  
も淋しき夕べ

かなしさの涙おさへて朝月夜四國をあとに舟  
出せし春

をさな子が小さき夢をつゝみたる紹蚊帳に青  
きおそ夏の風

夏の日は緑に疲れものみながうす黄にうつる  
秋をむかへぬ

夕ざれば旅の心を慰めて赤城の森に灯はとも  
るなり

旅にある遠方人をしのびぬる心地あしくも地  
鳴する宵

吾が心強くもてどもかの人のあだし涙に又う  
こきぬる

地を這へる枯れし木立の細き影つたひて夜の  
かなしみ來る

てまりなどつく年頃を淋しらに旅ありきして  
十六となる

淋しうも赤きダリヤは遊女めき灯かげにあり  
て人をまつ哉

若葉もれうす青う日のさす頃は夏やせを又氣  
にしたまひぬ

潮鳴を遠くきゝつゝたゝらふむ春日のどけき  
菜の花の園

輪にめぐりうなるら遊ぶ村はづれ橙色にさす  
秋の月

夕ぐれの悲さにたへでいつも立つ岡の草家の  
小さき灯

ねちくと物をいふ人ひたくと夕日の岸に  
潮のうつ音

ひらすさ

齋藤白雨

とぼくくと、さすらふ人  
白雲はゆたに、夏の陽はぢりくど  
希望も絶えて、あはれや今は唯ひとり  
行く處も知らに

路の邊のさゝやかな紅い花  
ちよろくと流るゝ白い水  
「青」一面の廣野の寵兒！

一足ごとにやる瀬なく  
あれはのかにも聞ゆるは  
鐘の響か

とぼくくと、夏の陽は暮るゝ  
漂浪人は、たゞ獨り

(一九一三、五日)



# 初夏の夕

三崎幹一郎

終日水田に蘆草かき集めて白くふやけた足を、冷たい堀のきの水に洗つて、格子戸をくゞるこ、だゞ廣い庭の隈々は、深い洞穴のやうに眞つ暗である。竈の火が、勝手の黒光りの戸欄に映えて、ぼかゞゞ人の影を、化物のやうに寫して居る。汗の焦げる香に引げり込まれる様だ。天秤棒や、ふご鎌を、手なれた隈に片付て開放した。五右衛門風呂にあぐらをかくと、肉が融る様である。夕映に染つた湯氣が、軒を匍匐つて出る。

一本の晩酌に、額を條立てし、燻つた顔を、飽き足らない様に、蚊遣の煙がえふして居る、今しがた夕雨の雲間から、月が窺いた空耳かと思はる、犬の聲が聞ゆる。涼しい風の、しのぶの風鈴を五つ六つせはしく鳴して、魂を奪つて行つてしまつた、後には隣の田の匂が淡く残つて居る。

# 楢林

里見登一

降りつもる雪をはらひて嬉しくも友まつ宿に  
咲ける梅かな

君か代の千代祝ふらむ松の上に群れるるたづ  
の聲ののどけき

春雨のそほふる度に色まさり緑につゞく楢林  
かな

咲きにはふ櫻は散りて見はるかすみどりの若  
葉清くしげれり

軒ならぶ都はなれて壁白くたてる我家のなつかしきかな

常盤木の下に一きはかゝやきて夕日ににほふ山吹の花

岩間もる泉のもとに立ちよりて道はかどらぬ夏の旅人

手まりつき遊べる兒等が氷る手をふく息白し冬の朝かな

吹きあれし夕の風は音たえて夜深くつもる庭の白雪

# 戀

水之江華月

北風寒き武藏野に

獨り淋しくさまよひつ

しばし雲間を洩れ出て

しづかにしのぶ影見れば

月は戀にも似たりけり

戀はわれには生命なり

戀あるが爲にわれは活く

あゝ君のすがたのおぼろなり

二人の間をむすぶてふ

出雲の神よわれ等に幸あらしめよ

月にむらくも花に風  
此の仇なみのよせ來るも  
などて二人の中をさき得んや  
この燃ゆる思ひと熱き血を  
誰か知るらん知る人もなし  
かなたをさしてなきゆく雁二羽  
隠れもゆくか雲の外」

### 若葉

春たけて夏きたるらし深山路の若葉の梢色ま  
しにけり  
時日まで花よくとめでられし櫻も今日は若  
き葉となる

佐々木松堂

### 蛇かご

紅梅の花の木の間に見ゆる哉いたゞ  
き白き遠方の山  
汐風にかたなびさせる磯松のはひ根  
かこみてもゆる若草

をりくは風にたよふ池の面の水草かつき  
て蛙なくなり

雉子のこゑとほくきこえて小雨ふる谷のかけ  
路に椿こぼるゝ

まかせたる苗代水にうつりきてかはづなく夜  
に春さめぞふる

若鮎のつらなりのぼる山川の水にもまるゝ山  
吹の花

白鳩のむれてとびかふ山寺の塔をかこみてわ  
か葉しげれり

かゝる名は誰がおほせけむやさしくもさける  
夏野の鬼百合の花

水鉢のあしをなびけて涼しくも夕かせわたる  
まどのうちかな

しらはりのかはほり傘の見ゆるかな鈴菜實に  
なる畑の中道

山川のきしの蛇かごにこしかけて照日さかり  
に翁あゆつる

さなきだに打ふす稻穂いたはらであな心なの  
露のしわざよ

おひすがひかもめこえゆくいを山に夕日はさ  
して時雨ふるなり

霜しろき裾野のはらを横ぎりてくる木をはこ  
ぶ荷馬ゆく見ゆ

あら驚のかがなくいその大岩に雪ふきつくる  
 おきのゆふかせ  
 をさな子がなげし小石におもしろく波の輪お  
 ころ池の面かな  
 日あたりによせをすゑて鶏のひなをかひた  
 つ野べの一つ家  
 名はいかに年はと問へばうつむきて笑ふをと  
 めのにくからぬかな  
 身をなげし人ありときく青ふちの波にたよ  
 ふ白くものがけ

わらぶきの家ばかりなる村中にいらかそびえ  
 てたつみ寺かな

松原のつゝるところの磯ざきのおもしろき家  
 は誰がなりどころ

釘のあと赤くにじめる舟板のいたがきつゞく  
 うみづらの里

賤の女はもどかしげにも降雨に牛おひてゆく  
 里のなかみち

ありとしも見えぬ小道の小石にもつまづきや  
 すしあはれ世の中

世の中を思ひせばめてかなしくもわれからき  
くよ夕暮のかね

何でとの思ひになやむふづくゑによれるをと  
めの眼はうるみたり

今日もまた市のさか路に荷車のあとおすをぢ  
が宿世をぞ思ふ

かひなしと知りてなげきし悲みを此度は君が  
繰返すらん (母の喪の果たる頃父を失つる友に二首)

よみがへる事もやあるとなきがらを我れはい  
く度さしのぞきけむ

# 有明月

木下春雄

有明の月をうかべし影もなく雨にみだるゝ池  
のおもかな

はてもなき廣き砂地のまひるときこゝちよげ  
にも雨ぞふりくる

稻妻のをりゝひかる古池にやみをゆすりて  
蛙なくなり

清談にふける翁かやぶかけの家は朝より酒か  
ほるなり

あれにあれて波さかまきし海原にたゝ一むれ  
のかもめとふみゆ

すむ人の心のまゝに家々は高く低くも見ゆる  
なりけり

月めづる吾にしけとか秋のかせ散りし木の葉  
を吹きよせにけり

ましらなく木曾の山路にさく椿谷のなかれに  
ほろくゝとちる

沖の島は遠くかすみて苦船の灯かげゆれゆく  
川口の海

悲

桃の花

ほろびゆくわが二十歳の身はかなし若葉を見  
ても涙流るゝ

闇の夜の静けさ破り大空に花火ほのめく面白  
きかな

秋の雨奈良はよき宿うつくしき女とながき一  
夜を泣きぬ

歡樂のつきせぬ町よ白壁の家にてきゝし小鼓  
の音

こがらしや夜離の君を悲しみて炬燵にひとり  
物案じ居り

かたゐらがさゞめく中を自動車は王者のごと  
くほこりゆくかな

一すじのぬけし黒髪ながめゐる心やれたる面  
やせの人

京にして少女を見ればうらがなし家なる君が  
おもわに似たれば

春の夜やほろ酔ひの君がまなざしとかすめる  
月といとよく似たり

メランコリア

枕流子

初夏の人なき午後の静けさにつれなき君を思  
ひつゞくる

めさむるよいぬるに辛らき病院の白きベッド  
に涙しみゆく

新しきカーテン引ける病室の窓をのみ見る淋  
しくあれば

たそがれの室の隈よりおぼろかにメランコリ  
アの色は葡萄ふ



春  
夏  
秋  
冬

四八

飛木皂角子

春風に羽毛飛ぶ雞舎掃除の日

樂人の戯技春暮るゝ江に船や

楊子啣みて朝風の苗圃裕寒ム

家寶とも泣訴せん机案さみだる、

燕空の夕風や御苑掃く日なる

夕しぶき霧に似て水車尻の萩

瓢柵もこぼつ頃枯野霧に住む

三五人戻る巻旗鳴く千鳥

◎野人語

五〇

- 「罪」と「滅び」「放縱」と「死」とはそれ連る鎖である
- 知識に誇る罪の實は極小な理性といふ殻をも破り得ぬ憐れな人間となる知識慾は醜の醜だ。
- 宿命に満足し儚ない運命に甘んじ汚辱の手に握られ深い暗い谷へ流れ落つる人間の悲しさよ。
- 「不安と懷疑」「反抗と破壊」「煩悶と死」此處に宗教の門は開ける人生は遊戯でない信仰は生命である。
- 人の子よ汝は罪過と醜惡の化身なるア惡魔の試練に勝ち魔界の天使に降服せる勿れ。
- 美術も文學要するに怪異と誇張に過ぎない
- 虚飾と煩鎖な文明の美裝に眩耀して葬られて内省も思索もない人間は何且動物といふ外はない。
- 獅子は吠える事を許され虎は嘯く事を許され狼は食ふ事を許されて然らば人間は？
- 古い道學者の道德説に耳傾けるよりも去つて荒野蕭條たる暮畔の逍遙か却てま

した。

管絃

五十里秋三

江戸川や舟に棹さすひとの上にあちる花びらの  
うつくしきかな

若葉かげ花はいづことたゝずめば春逝くかた  
につばめ飛びゆく

ふる雨に浮びゆく傘の二つ三つやがて消え入  
る言問の里

管弦の音する方の川面にみだれ流るゝともし  
びの影

五一

たゞひとり心ひかるゝ君ありてうたげのひま  
 におもひなやみぬ  
 すがたみに帯のむすびをかへりみてはゝるみ  
 にけりはしき少女子  
 家づとを指折かぞへ旅路なるちゝのかへりを  
 持ちわぶる子ら  
 虫干にとり出したるつるぎをば見つめておも  
 ふ若かりし身を  
 業卒へて家もつ身とはなりにけりつゝみかね  
 たる胸のうれしさ

# 蜀の紅葉

石川 隆

月々もり小雨をばふる大原の古城のあたりま  
 しらなくなり  
 さし出づる朝日のかげをなごりにてあはれ消  
 えゆく今朝の霜哉  
 とこしへに變らじものと誓ひしをうつろひや  
 すき人心哉  
 五丈原吹きくる風にさそはれてあはれちりし  
 か蜀のもみぢ葉（諸葛武侯）

身は死する今はのきはに至るまで主思ふ心ゆ  
あはれなる哉 (全)

身はたとひ主の刃に消えしとも魂はのこれり  
千代萬代に (方孝儒)

妙法の法の旗風吹きしより仇の醜ぐさみな靡  
きけり (加藤清正)

馬なめて明の大軍をふみ破る姿いさまし大和  
ますらを (全)

思はずも躍りかへりて打ち据ゑき狸翁の像を  
見し時 (徳川家康)

# 大利根

能勢晴吉

朝日影うすもの掛けし心地して上野の岡に若  
葉しげれり

三つ二つほろくおちて悲しさはまさる若葉  
の青梅の實に

大利根に霞か浦に吹雪して海人がいさりの影  
うすれ行く

三年そも夢とはかなき我が姪の歸らぬ旅路た  
どられしより

青葉影手向の花に袖ひちて姪のおくつきいさ  
りあへずも  
はらかなの集ひてむつぶ様みればうら悲しく  
も昔こひしき

過古城趾

朴園

哀禽過古壘。呼起九原魂。 虛照耿荷上。  
一天明月痕。

### 春まつ夢

中島正遠

き、もして見もして友の死に泣きしわれひと  
り漕々三十路磯かな ——— 年を迎へて ———  
人知れず違ひのすぢのまつはれて絶えたる中  
の思出かなしき  
人こひしこひしき人のまぼろしを梅の下技の  
花に見るかな  
こたつ火のぬるみ行く夜に雨降りぬ春待つ夢  
のうたゝねにして

うつしゑの姿はこるにあらねども母なつかしく見んとうれしき  
——寫眞を家に送るに添へて——

花ざかり人も出ざかり春風ののどけくわたる  
飛鳥山かな

肥の國の松浦の川の朝がすみあしも白帆もだ  
と夢のなか

柔かにゆる、藤浪たちかへりうらなつかしき  
春の香ぞする

さ月闇をぐらき道をまよひつ、むかししのぶ  
の露ぞかわかぬ  
——高崎正風翁をしのびて——

句く 骸なきがら

石 羊

笠目深道行き雛と誰が目にも

濱麗貝塚の名に供養貝

大工来て見舞へり母屋麗に

午後に神樂に神前の相撲賑へり

廓ほとり打つ晝砧遊女にや

○ 瀨踏み築のあり落鮎の日々となり

○ 才幹を悼む宿糸瓜愚伸あり

○ 長き夜の高談や燈台近き家

○ 二百十日高々に城矢窓見ゆ

○ 蟲害に果樹悲めり二百十日風々

○ 登山期の雨となり一しほの秋

### ありし日の歌

藤田啓吉

飼ふ鳥の放たる時の驚きを吾もまねぶか遠か  
らぬ日よ

よし礫けばよし吾を揉め行くところ歌あり詩  
ありこれを樂しむ

世界の一隅に立ちて星とつぶやくこともある  
べし冷かさ

あゝ君よ世は縁して歌はんか詩の國に立ちい  
かにおはすや

心からもいふ如く吾もまた女といふを味ふ  
なりぬ

吾胸を抱きし人は毛面なり死の使をばさんと  
すや

あどけなく落つる涙すひあげて妻はさけびぬ  
「あゝ、死すや世も」

朧なりみ園にさける黄昏の花にも似たる去り  
ませる君

来よ君は吾を思ふ日歌誦して心の底の雫漏ら  
さん

### 小ねずみ

武市 王 充

紫の葡萄ながむる小ねずみの眼あいらし夏の  
風吹く

清水わく古井のはとり夏草の茂みに立ちて顔  
寫し見ぬ

兵士のいまはの息にかよひけむ夏くさしげみ  
吹き渡る風

武藏路や緋桃咲きける丘の家に妹に似し子を  
見て行きぬ



# 半醉歌

不死鬼生

六四

馬三千那須の牧場の若草に嘶くこゑの高くも  
あるかな

巖碎く力いづこにひそむらん木の葉をくゝる  
山川の水

熊はふる蝦夷の一村日はくれて雪ふりしきり  
風ふきすすぶ

もろこしの荒野が原に立ちさわぐ雲吹き拂へ  
東の風

三萬三千三百三十三體のはとけかぞふる春の  
たびかな

奈良にきて鹿鳴く宿のきのこめし故郷こひし  
初秋の旅

物學び怠る兒等をいましめてしのぶわか身の  
昔おかしき

消え残る雪はともあれうぐひすの聲に春めく  
比良の山里

戀に泣く五位の公達さまよへる朱雀大路や朧  
夜の月

六五

大比枝や月はかすみて咲く花の蔭にたゝずむ  
山法師かな

春雨のおして降る間に若葉してあらゝぎ低し  
奈良の寺々

宮人は花のうたけか今日も亦車きしらせ嗟峨  
さして行く

母戀し吾妹子こひし朧夜の雲のなか行くかり  
かねのこゑ

願みて三年はこゝに夢なりき歸るか何をいへ  
づとにして

### 雞肋吟

伏木誠義

莫哀歌客

### 送内田先生遊大和 録二

堂々筆陣力論争。邪說排來大義明。欲訪南朝忠  
烈跡。春風一路詠花行。

芳山四月落花辰。憶起當年奮戰人。願望低回斜  
照裏。今忠臣弔古忠臣。

### 悼亡友

録二

春寒三月玉蘭摧。殘雪庭前花未開。往事回頭只  
一夢。悲風蕭颯夕陽頽。

竹馬交遊管鮑情。不圖今日隔幽明。杜鵑聲裡蕭  
々雨。半夜思君淚欲傾。

六八

戲寄友人某 某今爲鄉賢長

俸祿不多威不高。不安運命細於毛。鵲形菜色家  
無米。只向頑童意氣豪。  
立教壇唯我獨尊。丁寧反覆說師恩。堪憐子村  
夫子。有否男兒不屈魂。

琵琶湖春色 次韻

明鏡北開湛不流。春風載酒放輕舟。黃昏更有  
山月。對岸花香入夢幽。  
落花泛々水空流。辛崎松間棹片舟。暮雪峰頭無  
暮雪。江州春色滿清幽。

嵯山三上山之別名又近江富士

姊川懷古二十首之內

予家瀕姊水之陽。當年戰跡  
一々在指顧之間。

振威湖國氣如霓。城闕接天天日低。休道興亡今

古事。空山落月野猿啼。  
小谷山。淺井氏三代之城址

腥風血雨去悠悠。白露滿江姊水秋。橋畔月明人

不語。英雄心事付西流。  
野村橋。淺井織田決戰之地

驅馬曉風縱又橫。喊聲動地迅雷轟。誰知血水屍

山跡。五穀穰々謳太平。  
血原。朝倉德川決戰之地

壯圖空破逸長蛇。千載思君不堪悲。勇士墳頭經

月暗。蟲聲唧々草離々。  
遠藤塚。直經欲刺信長事不成殪。

六九

吾等國學院に入りてより年を閲する事茲に三、今や母校を去らんとするにあたり恰もよし、新樹空を蔽ひ、翠色滴らんさす、新葉はか弱けれど見すや、そこには正に虚空をついて、伸びんとする生々の氣に満てるを、而してまた世を動さんとする潑刺たる力のひそめるを。

回顧するに昨孟春、斗雲會なるものを起して、主として短歌の研究をなし、其他をりく俳句、漢詩等の創作に力を儘し、吟什漸く堆かからんとす、乃ち各自の作品數拾篇を集め、一卷さなし梓に上して記念となす。題して「新樹」と云ふ。あゝ是新樹今より彌々榮えて、遂に亭々として雲に入るの巨材たれよ。

明治四十五年六月一日

編者識

明治四十五年六月十八日印刷  
明治四十五年六月廿一日發行

(非賣品)

編纂者 黒田克巳  
東京市牛込區築地町十五番地

印刷所 鈴木印刷所  
東京市小石川區西古川町廿五番地

印刷者 金子藤作  
東京市小石川區西古川町廿五番地

